

(19)日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11)特許出願公開番号

特開平6-173165

(43)公開日 平成6年(1994)6月21日

(51)Int.Cl.⁵

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

D 0 6 M 13/50

A 6 1 L 9/01

C 0 9 B 47/04

8718-4C

7306-4H

7199-3B

D 0 6 M 13/ 50

21/ 00

Z

審査請求 未請求 請求項の数4(全 4 頁) 最終頁に続く

(21)出願番号

特願平4-350923

(22)出願日

平成4年(1992)12月4日

(71)出願人 000148151

株式会社川島織物

京都府京都市左京区静海市原町265番地

(72)発明者 妹背 達治

京都市左京区静海市原町265番地 株式会

社川島織物内

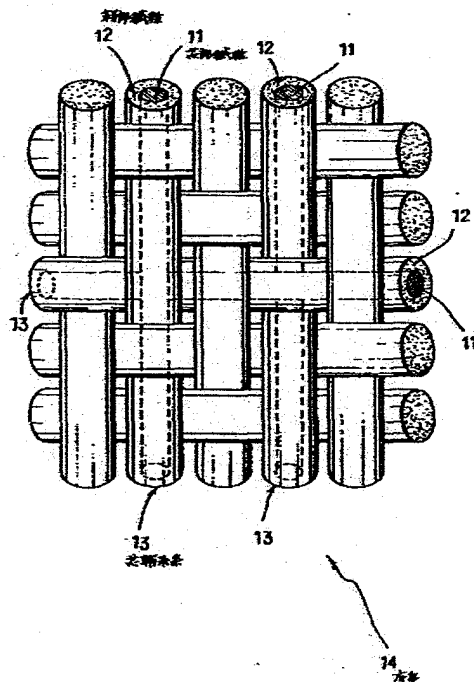
(74)代理人 弁理士 千葉 茂雄

(54)【発明の名称】 消臭性布帛と製造法

(57)【要約】

【目的】 外観色彩が消臭剤に左右されず、耐久性のある消臭性布帛を経済的に得る。

【構成】 芯鞘糸条13を有する布帛14に消臭剤を付与して消臭性布帛を製造する場合、芯鞘糸条13の芯部11と鞘部12を互いに染着能を異にする繊維によって構成し、消臭剤には芯部繊維11に対し染着性を有し鞘部繊維12に対し染着性を有しないものを用い、消臭剤を芯鞘糸条13の芯部繊維11にのみ染着させる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 芯鞘糸条13を有する布帛14に消臭剤を付与して消臭性布帛を製造する場合において、芯鞘糸条13の芯部11と鞘部12を互いに染着能を異にする繊維によって構成し、消臭剤には芯部繊維11に対し染着性を有するが鞘部繊維12に対しては染着性を有しないものを用い、消臭剤を芯鞘糸条13の芯部繊維11にのみ染着させることを特徴とする消臭性布帛の製造法。

【請求項2】 前掲請求項1に記載の消臭剤が金属フタロシアニンであり、芯部繊維11が綿、レーヨンその他のセルロース系繊維であり、鞘部繊維12がナイロン、アクリル繊維、ポリエステル繊維その他の合成繊維であることを特徴とする前掲請求項1に記載の消臭性布帛の製造法。

【請求項3】 芯鞘糸条13を有し、その芯部繊維11にのみ消臭剤が染着しており、その鞘部繊維12が消臭剤に対する染着能を有しないことを特徴とする消臭性布帛。

【請求項4】 前掲請求項2に記載の消臭剤が金属フタロシアニンであり、芯部繊維11が綿、レーヨンその他のセルロース系繊維であり、鞘部繊維12がナイロン、アクリル繊維、ポリエステル繊維その他の合成繊維であることを特徴とする前掲請求項2に記載の消臭性布帛。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、消臭性布帛に関するものである。

【0002】

【従来の技術】従来布帛の消臭加工用に市販されている金属フタロシアニン誘導体、水酸化銅イオン錯体、金属シアスコルビン酸錯体等の消臭剤は、染料の如く繊維に対する染着性を有し、繊維を一定の色に着色するので、多彩色でカーテンや壁張地に適した消臭性布帛は得難い（特公平3-10728・特開昭63-12723）。かかる消臭剤の欠点を解消する方法として、特公平3-36943（特開平2-298234）は、消臭剤に着色された繊維を芯部に用い、消臭剤が付与されず消臭剤に着色されない繊維を鞘部に用いた芯鞘糸条によって布帛を形成し、鞘部繊維によって消臭剤に着色された芯部繊維を被覆し、消臭剤特有の色彩が布帛表面に現れないようにする方法を提案している。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】上記の提案によれば、多彩な消臭性布帛を得るには、その色彩に応じて染色した多くの鞘部繊維を用意し、需要に応じた色彩の芯鞘糸条を紡績しなければならない。しかし、そのように原毛や原糸の段階で鞘部繊維を染色しておくことは、資材管理を煩雑にし、資材の在庫期間が長くなってコスト高になるし、製織・編後に生じる残糸は着色されたものであるが故に他の布帛へは転用し難く、同色の糸条であつて

もロットの異なるものは僅かな色彩の違いによって布帛に色斑を生じるので、ロットの異なる残糸をまとめて使用することは現実問題として不可能であり、残糸は結局ロスになるので、その分だけ布帛がコスト高になる。一方、鞘部繊維を紡績の段階で染色せず、それを製織・編した布帛の段階で染色する場合、その芯部繊維に染着していた消臭剤が、鞘部繊維の染色の際に行われる高温加熱や洗浄処理時に芯部繊維から離脱し、又、高温加熱や洗浄処理によって消臭剤が芯部繊維から抜染されないとしても鞘部繊維へと移行して鞘部繊維の色彩を損なうなどの不都合が生じ、芯部繊維にのみ消臭剤を付与しておく意味がなくなる。本発明は、かかる不都合を解消し、製織または編成後の布帛の後加工において、糸条の芯部に消臭剤を付与して布帛の色彩を変えることなく消臭加工することを目的とする。

【0004】

【課題を解決するための手段】本発明は、繊維に化学的に結合して着色する消臭剤の染着機能が、染料の染着機能と同様に全ての繊維に対するものではなく、繊維の種類によって染着しないという選択性を有し、従来染着機能を有するものとして公知の金属フタロシアニン誘導体、水酸化銅イオン錯体、金属シアスコルビン酸錯体等の消臭剤が、綿、レーヨンその他のセルロース系繊維に対し染着性を有するものの、ポリエステル繊維、ナイロン、ポリプロピレン繊維等の多くの合成繊維に対しては染着性を有しないことに着目して完成されたものである。

【0005】即ち、本発明は、芯鞘糸条13を有する布帛14に消臭剤を付与して消臭性布帛を製造する場合において、芯鞘糸条13の芯部11と鞘部12を互いに染着能を異にする繊維によって構成し、消臭剤には芯部繊維11に対し染着性を有し鞘部繊維12に対し染着性を有しないものを用い、消臭剤を芯鞘糸条13の芯部繊維11にのみ染着させることを特徴とするものである。従って本発明に係る消臭性布帛14は、芯鞘糸条13を有し、その芯部繊維11にのみ消臭剤が染着しており、その鞘部繊維12が消臭剤に対する染着能を有しないことを特徴とする。かかる消臭剤としては金属フタロシアニンを使用するとよく、芯部繊維11は綿、レーヨンその他のセルロース系繊維によって構成し、鞘部繊維12はナイロン、アクリル繊維、ポリエステル繊維その他の合成繊維によって構成することが適切である。

【0006】

【実施例】織度2dのレーヨン繊維を芯部繊維11とし、織度3dのポリエステル繊維を鞘部繊維12とし、芯部11と鞘部12のデニール比率が2対8であり、総デニールが900dである芯鞘糸条13を緯糸に用い、織度2dのポリエステル繊維に成る総デニール350dの糸条を経糸に用いて織成した織物14のポリエステル繊維を、常法に従って染色した後、金属フタロシアニン溶液に浸漬・絞液し、130℃にて3分間加熱処理して

消臭性ポリエステル繊維織物14を製造した。この織物14は、その芯糸条13の芯部繊維11だけが消臭剤によって緑青色に着色されており、鞘部繊維12は消臭剤に着色されておらず、消臭加工による織物14の色彩変化は認められなかった。次に、消臭加工前後の織物14につき、JIS-L-0842による耐光堅牢度とJIS-L-0844による洗濯堅牢度とJIS-L-0860によるドライクリーニング堅牢度を調べた結果何れの堅牢度も5級であった。

【0007】

【発明の効果】本発明に係る消臭性布帛14は、芯糸条13を有し、その芯部繊維11にのみ消臭剤が染着しており、鞘部繊維12が消臭剤に対する染着能を有しないので、芯部繊維11に染着した消臭剤によって鞘部繊維12が変色する虞は全くなく、消臭剤によって布帛全

体の色彩や染色堅牢度が損なわれることはない。そして消臭剤は、製布後の消臭加工によって芯糸条13に付与されるので、消臭加工前の芯糸条13や布帛14が、消臭剤の有無や色彩によって小ロット化することなく、それらの大ロット化によりコストダウンが図られる。かくして本発明によると、消臭剤によって外観色彩が左右されず、耐久性のある消臭性布帛を経済的に得ることが出来る。

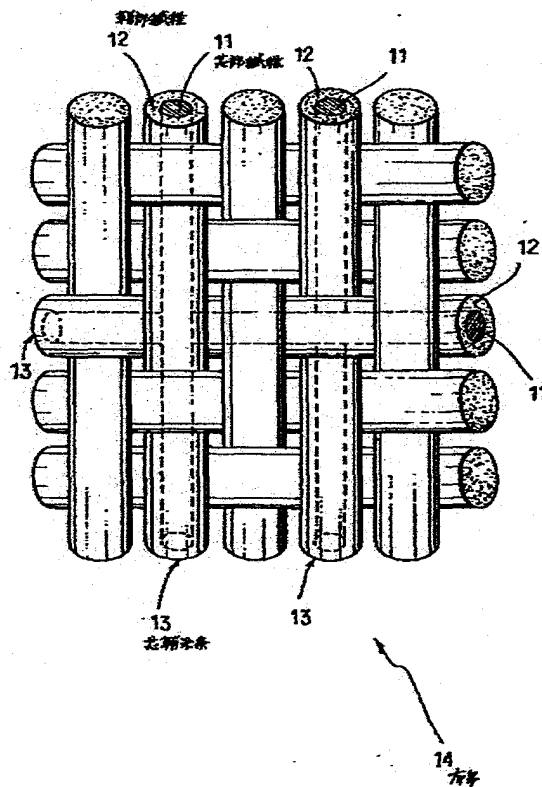
【図面の簡単な説明】

10 【図1】本発明に係る消臭性布帛の拡大表面図である。

【符号の説明】

- 11 芯部繊維
- 12 鞘部繊維
- 13 芯糸条
- 14 布帛（織物）

【図1】



フロントページの続き

(51) Int. Cl.⁵

D 01 D 5/34

D 01 F 2/00

8/14

D 03 D 15/00

識別記号

庁内整理番号

F I

技術表示箇所

7199-3B

7199-3B

Z 7199-3B

E 7199-3B

(4)

特開平6-173165

// D06M 23/16